



佐野短期大学学報

# かたくり



ACCREDITED  
2005

本学は平成17年度勸  
短期大学基準協会によ  
る第三者評価の結果、  
適格と認定されました。

発行/佐野短期大学

栃木県佐野市高萩町1297

電話 (0283) 21-1200



謹賀  
新年

ファッションフィールド2年 ディスプレイⅡ 「正月飾り」

## 年 頭 の ご 挨拶



## 「地域の研究拠点」を目指し

理事長 浦田 奨

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、穏やかな新年をお迎えのことと存じます。また今年も本学園に対し、格段のご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

さて一昨年来、我が国は震災・原発事故による深刻な被害からの立ち直りを目指し復興にあたってきましたが、いまだ問題も山積しています。一方世界的な経済不況も、欧州経済は最悪の状況を回避したものの、これまで牽引役だった中国や開発途上国の成長にも陰りが見え始め、深刻な状況は続いています。

このような問題は、現代を生きる人々の社会生活に影響をもたらすのみならず、国家の未来に極めて深刻な影響を与え、私たちの子孫にその埋め合わせを強いるに違いありません。時代は、人類が反省をなおざりにしてきた代償としての「負の遺産」を私たちに突きつけ、今ここで清算することを求めています。

その一方で、世界の舞台で活躍する日本人の姿に励まされることもありました。その中でも、iPS細胞の研究で日本では25年ぶり2人目のノーベル生理学・医学賞を受賞した京都大学の山中伸弥教授の堂々とした態度には、誰もが感動を覚えたことと思います。山中教授はアメリカで胚性幹細胞（ES細胞）に出会い、帰国後も研究を続けましたが、周囲から理解してもらえず研究者の道を捨てようと考えたこともありました。しかし「一度、研究をやめかけたんだから、思い切り難しいことを」と皮膚から万能細胞を作る挑戦を始め、06年にマウスで、07年には人でiPS細胞の開発に成功し、一気に注目されました。また、20年近く研究を続け、「何が良いのか悪いのかすぐには分からない。一喜一憂せず淡々と頑張るしかない」と、苦難の多かつ

た研究者としての歩みを語っています。

協力者のほとんどない中であきらめずに困難な研究に立ち向かった山中教授の力はいったいどこから湧いたものだったのでしょうか。私は、山中教授の研究に対する姿勢、またその言葉の中に「自立自尊」とも言うべき精神の力強さを感じます。周囲の言動に安易に流されることなく、自らを信じ、自らの力で人生を切り開いていく逞しい心、それを持たない人間に、いったいどんなことが成し遂げられるのでしょうか。

混沌とした世相の中、大学教育の役割はますます重要なものになっています。厳しい時代だからこそ、自らの軌跡を信じ、その延長線上にある未来へ果敢に挑戦する逞しい若者の育成が教育に携わる者の急務です。また、短期大学は地域に密着しその発展を促す地方の研究拠点としての役割も担っています。昨年、本学は国の定める「第三者認証評価」を受けましたが、これは、大学の教育・研究・経営等について客観的・可視的な評価をするものです。その評価にあたっては、本学が掲げてきた「想う人」「考える人」「行う人」を根幹とした教育は、ますます大きな意味を持つに違いありません。今年度のみならず毎年、95パーセントを超える就職決定率を誇るのも、そのような理念に基づいた教育を学生とともに実践してきた証です。今後さらに、社会・地域からの要請に誠実に応え、充実した教育を行い、高度な研究実績を残せるよう、本学の水準を高まることを念願し、年頭の辞といたします。





## 年 頭 の ご 挨拶



## 新 年 雑 感

学 長 輿 水 優

新年おめでとうございます。

平成25年を迎えました。平成の年号になって、すでに25年目になるわけです。「降る雪や明治は遠くなりにはけり」という中村草田男の名句にあやかり、そろそろ「昭和は遠くなりにはけり」と言いたい気分です。「遠くなりにはけり」の一句には、過ぎ去りし、なつかしい日々に対する感慨がこめられています。これに「昭和は」と冠をつけると、現今の時代や社会になじめない、いささか取り残された口ぶりに聞こえます。一般に人は年をとると、移り変わる世相を見るにつけ、「昔はよかった」と嘆きます。中国には古来、「人心日に下り、国まさに国ならざらんとす」と、世の中の動きに嘆息をもらす、決まり文句があります。この表現は、自分のことは脇に置き、人びとが日に日に墮落する様子を指摘し、ただ慨嘆するだけです。唱えているだけでは「人心日に下る」世の中から抜け出すことはできません。

一昨年の地震に端を発した原発問題を筆頭に、私は、昨今の政治や経済に山積する難問と、それらを動かしている人々の行動や言動を見聞するたびに、この「人心日に下り、国まさに国ならざらんとす」という言葉が口をついて出て来ます。むしろ「国まさに国ならざらんとし、人心日に下る」というべき

かも知れません。たとえば政治家の誤った判断や、外交や経済運営の失策などが続くと、後者が適していると思いますが、新聞の経済面や社会面に報じられる世相の諸相を見るにつけ、やはりそこには人びとのモラルや社会通念の変化が根幹にあるわけですから、前者の「人心日に下り、国まさに国ならざらんとす」の原文の方がふさわしいのか、とも考えます。ニワトリが先か、タマゴが先かという議論に似ていますが、どちらにせよ、ただ嘆いているばかりではいけません。この状況からどのように抜け出すのか、これはいま私たちが直面している課題です。

現状打破には、やはり若い世代の活躍が期待されます。しかし、そのためには彼らを導く指針が求められます。それは決して過激な思想でもなく、カリスマ指導者でもありません。私は歴史に学ぶことと、さらに親が子どもの、また年長者が年少者の、先輩が後輩の、それぞれ良き師となることで、「人心日に下る」風潮だけでもくい止めたいと思います。日本人は悲惨な戦争体験や原爆の被爆体験をはじめとする、自らの歩んで来た道を知るべきです。また、自らの言動や行動について他人のことも考える、他者との共生という視点を忘れぬことが大切です。



## 平成 24 年度 公開講演会開催

11 月 29 日（木）に本学客員教授である峰村澄子先生による公開講演会が、佐野市文化会館において開催されました。この公開講演会は佐野市との地域連携事業として共催されました。講演会では、「こどもの成長と音楽の効用」についてのお話がありました。また、講演に先立ち、本学園の 40 周年記念のために峰村先生が作曲された「学園賛歌（君よ）」を S・E・Mサークルの学生とともに合唱されました。会場には児童フィールドの全学生をはじめ、子育て中の方々や幼稚園、保育園の関係者が来場され、熱心に聴講されていました。



### 学報編集委員

穂積 元、岡泉志のぶ、稲見崇司、阿部芳子、小竹利夫、石塚将之、大久保佳世、飯塚則章、赤坂悦子